

●熊本大学 自然科学研究科

「イノベーション創出のための大学院教養教育」の事例 <理工農系>

具体的に何を実施し、何が困難であったのか

物事を根本にまでさかのぼって考える力や、幅広い視野から物事を把握する力を養成することを目的として、大学院教育の中に教養教育のカテゴリーを設けた。科学・技術の根底にある数学について、その思考方法や応用の仕方を学ぶ数理科学特別教育プログラムと、哲学・歴史・芸術など広い人間活動を学ぶ人間科学特別教育プログラムという、二つの科目群から編成された。

多彩な講義を開講したが、十分な数の受講者を集めるのが困難であった。

苦労したこと、困難であったことの詳細な要因は何だったのか、それにより実施内容がどのような影響を受けていたのか

教養科目の取得単位は修了要件に組み入れないとしたため、学生に対する明示的なインセンティブがほとんどなかったこと、教養科目の開講時期・時間帯を特段に確保しなかったため、専門の講義や実験と重なって幅広い学生の受講が難しかったこと、大学院教養教育の意義が教員間に広く共有されてはいなかったため、教員による履修指導にも限界があったことなどが要因と考えられる。講義内容はそれぞれ有意義で興味深く、受講者からは高評価を得ていたため、受講者に広がりがあれば目指す効果が得られたと考えられる。

どのように対応し、そのような結果が得られたのか、また、その結果が望ましいものではなかった場合、あらかじめどのように対応していれば適切であったのか、どうすればより良い結果を導くことができたのか

受講者を増やすための工夫をいろいろ施したが、最終的には教養科目の修了要件化、教養科目開講時期・時間帯の設定、大学院教養教育に関する教員・学生の意識の変化が必要であると判断した。そこで大学院教養教育に関するワーキンググループを設け、そこでの議論を各専攻にも流していくことで、教養教育についての議論を広め、また制度として修了要件化、開講時期・時間帯の設定を決定した。意識のある学生からは、受講したいが専門の講義・実験と重なって受講できないとか、受講を促す仕組みになっていないという意見が寄せられたが、その批判に応える対応を取ることができたと考える。